

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 5 日現在

機関番号：32306

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25381037

研究課題名(和文)近代日本における「教育病理」の歴史的研究

研究課題名(英文)A Historical Analysis on Educational Pathology

研究代表者

下山 寿子(Shimoyama, Toshiko)

高崎商科大学・商学部・教授

研究者番号：30287908

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では学ぶ者の側、特に学校不適應等の児童・生徒の側、即ち制度としての学校に馴染むことが出来なかった児童・生徒の「学び」の意欲と志がどのように形成され方向付けられたかを有力なメディアが提供する「教育病理」情報の分析を通して通史的視野の基に情報の推移を確認することを目的とする。なかでもここでは、「教育病理学」という研究分野がどのように移入されたかについて明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The study examined the question of when, where, from whom, what kind of media, how and in what sense, educational pathology was imported, using historical methods. As a result, the following was found out. It was transferred as an academic term of pedagogy=educational science, psychology, psychiatry. German educational pathology=educational science concept was introduced in the early 20th century. Children flaw was broken at school early in the 20th century. pedagogy=educational science, psychology, psychiatry, journalism related to, psychiatry informed this word. I would like to demonstrate how this term was dealt with in the development process and differentiation process in future research subjects.

研究分野：教育心理学

キーワード：教育病理

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究は、「近代日本心理学における『教育病理』の系譜と心理・教育ジャーナリズム」を、継承発展させるものである。またこの間蓄積してきた『児童研究』等の心理・教育関係雑誌メディアは本研究にとって重要な資料である。しかし、精神医学関係雑誌メディアの蓄積は乏しく、本研究は、その欠を補うものになると予測した。

(2) 「教育病理」の歴史的研究は少ない。現代日本社会において「不登校」等の問題が重大な社会問題化している今日において、なお「教育病理」の実証的・歴史的研究は本格化していないのが現状である。また一方、近年、教育ジャーナリズム史研究は活発化しているが、「教育病理」を軸とし、その情報の推移分析を行った研究は、皆無と思われる。

(3) 他方、日本教育史研究分野や日本教育学説史研究分野において「教育病理」情報に着目しつつ、近代日本の教育史像や「教育病理学」と緊密な関わりをもって進められた日本教育史学説研究も皆無である。確かに菅原亮芳編『受験・進学・学校』（学文社、2008年）は、教育関係雑誌メディアが発信する情報を分析する手法において近代日本の教育史像の一端を解明している。研究代表者もその一翼を担ったが、心理と教育という側面からの研究であり、教育と心理と精神医学との関連は不十分であった。このように雑誌メディアに基づき、戦前に遡ってそれらのメディアが教師や保護たちにいかなる教育病理情報を提供したかの解明は行われていない。つまり教育病理情報の提供とその分布構造の実証的研究は不十分なのである。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、「近代日本における『教育病理』の歴史的研究」というテーマのもと、明治中期から昭和戦前期を対象時期として、心理・教育・精神医学ジャーナリズム、なかでも雑誌メディアに着目し、それらが発信し

た「教育病理」情報を、歴史的・実証的に考察することを目的としている。

(2) 「教育病理」情報を分析するにあたっては、受験競争と「教育病理」現象との把握、学校への就学・不就学と「教育病理」現象、医療と予防・対策に関する情報がいかに発信され、どのような読者に届けられ、いかに定着したか、あるいはしなかったか等を歴史的に探る。

(3) また、「教育病理」の導入と原型の成立過程、ドイツにおける「教育病理学」研究成果の紹介とその紹介のされ方、富士川游等の「教育病理」観、「教育病理」理解とその変遷、つまり「教育病理」現象について雑誌メディアは、何を伝えてきたかについて明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 平成25年度は、明治期から戦前・戦中期までを視野に入れ、人物研究としては、大村仁太郎、乙竹岩造、森岡常蔵等の著作・論文等を「異常児」「不良児」「劣等児」等のキーワードから、文献目録化した。また併行して心理・教育・精神医学関係雑誌を上記のキーワードから、その記事を収集し、一覧化した。

(2) 平成25年度、26年度における研究作業を通して、「教育病理」というタームだけでなく「教育病理学」という研究分野に着目することが重要であることが判明した。従って、「教育病理学」という研究分野の移入・普及過程を追求することが大切であるということ、その研究成果のひとつとして示した。

(3) 平成27年度は、過去3年間における研究作業を通して、「教育病理学」研究分野が、どのように移入され、如何に普及し、その過程で如何に変容したかを歴史的に明らかにする作業を行った。また、平成28年度は、以上の研究成果を集成し、最終報告の刊行を行った。

4. 研究成果

(1) 上述した研究目的、研究の方法に則り作業を続けた。今回の研究成果は、以下の拙著を基盤とするものである。下山寿子「近代日本における『教育病理学』の移入と普及過程に関する史的研究(1) - 明治期刊行『教育病理学』関係著作の整理を通して - 」『2013年度 検証・教育実習 - 教職課程年報 - 』2014年、149-162頁。下山寿子「教育学説史研究における教育研究者の個人史的整理に関する一考察 - 大村仁太郎と乙竹岩造と『教育病理学』概念の普及過程 - 」『2013年度 検証・教育実習 - 教職課程年報 - 』2014年、163-167頁。下山寿子「雑誌『児童研究』は『教育病理』現象をどのように伝えたか(1) - 『教育病理学』欄(1907~1909年)の再検討 - 」『高崎商科大学紀要』第30号、2015年、47-54頁。下山寿子・菅原亮芳「近代日本における『教育病理』の歴史的研究(1) - 『神経学雑誌』の発行母体・教育病理観・刊行状況の検討を手がかりとして - 」『2015年度 検証・教育実習 - 教職課程年報 - 』2016年、140-145頁。

(2) ここでは、「教育病理学」(Pädagogische Pathologie, Pedagogical Pathology)という研究分野がどのように移入され、いかに普及し、その過程でいかに変容したかを歴史的に明らかにすることを目的とした。

「教育病理学」は、言うまでもなく西欧で生まれた近代教育学の一分野であり、その起源は18世紀にあり、19世紀半ばには明確なディシプリンとして成立したとされている。ところで、このディシプリンの和訳の一部である「教育病理」という語は、独立して異なる形の普及を見せてきた。すなわち問題を含む教育状況を表現する、学術的なタームがそれである。学術的・専門的なディシプリンの名称の一部でありながら、一般性の高い汎用的呼称も持つという二重性を与えられてきたのが「教育病理」というタームである。

本研究では、このような二重の意味を持つタームである「教育病理」を視野に入れながらも、「教育病理学」という専門的な学問分野に着目し、その移入と分化そして変遷を、専門的な雑誌メディアの報道・論説・記事を手掛かりに分析しようとする研究である。

本研究で解明したい問題は3つある。「教育病理学」という言葉を字義通り教授学ないし教育心理学の中の一ディシプリンとして見た場合、それはいつごろ、誰によって、いかなる媒体の上に紹介されたか、という問題である。学術的ターム移入の時期的・事実史的検討に当たる。その学術的タームとしての教育病理学は、どのような事情を契機にし、どのような読者を対象として予想しながら、移入されたか、また移入の際にいかなる意義づけがなされたのか、という問題がある。学術的タームの意味論的・思想史的検討に当たる。より通俗的な、一般人への表現として派生したとみられる「教育病理」というタームは、専門誌その他のメディアから推察する限り、やがて一つの慣用語として児童研究の中に普及定着していったとみられる。その際、この用語にはどのような内包や外延が与えられ、それらはどのように変遷し、日本の教育用語としてどのように定着して行ったかという問いが浮かぶ。これはタームとしての変容問題だけでなく、その普及と意味に関わる問題である。

(3) 一連の研究の基盤として心理関係雑誌としては『児童研究』、教育関係雑誌としては『教育実験界』、精神医学関係雑誌としては『神経学雑誌』等の書誌的研究を行うと同時に、各雑誌メディアに掲載された「教育病理学」あるいは「教育病理」関係記事の収集と整理を行った。さらに、明治・大正・昭和戦前期における教育学辞典・辞書、著作、専門書・参考書等の文献を収集・整理して、「教育病理学」あるいは「教育病理」というター

ムがどのように記されているかについて検討した。

(4) これらの作業を通して、まずドイツ「教育病理学」が、明治30年代に日本人の手によって移入されたことが明らかになった。

ではなぜ、移入されたのか。その大きな理由は、急速に学校制度が導入され整備され、就学率が高まる近代日本において、教育実践を担った教育者や彼らに近い立場にあった教育学者たちに生まれた、児童(とりわけ、その時代に「瑕疵」があると捉えられた児童)とどのような関係を取り結べばよいのか、という問題意識が移入させたと言ってよい。つまり、教育課題に対峙した、彼らの揺れや戸惑いが、彼らに「教育病理学」を移入することを促したのである。

雑誌メディア等に掲載された「抄録」記事もまた、彼らが海外の研究分野を積極的に移入し、教育課題に対峙し問題を解決しようとした試みのひとつであり、そこに「教育病理学」にかかわる情報も含まれていた。その情報を、教育実践家や教育学者らは自らも活用したであろうし、また周辺の人々へと提供したであろう。

このような動向のもとに、従来の研究が明らかにしてきたように、医者・医学者たちも加わり、より強固な研究分野として「教育病理学」は成立してゆくのである。

目を転じてみれば、この時期には、雑誌『児童研究』が説いたように、児童を「科学的(学問的に)」に捉えること、あるいは「観察」することの重要性も説かれていた。そこには、教育学者、心理学者、医学者と様々な研究分野の学者たちが蝟集する。児童を「科学的」に捉えようとする、あるいは行動を観察しようとする試みのなかで、「教育病理学」は、それらを支える理論的支柱のひとつとして大きな役割を果たしていた、と言えるだろう。

(5) 最終報告書として、『近代日本にお

る「教育病理学」の移入過程と心理・教育・精神医学ジャーナリズム』(研究代表者:下山寿子、課題番号:25381037 平成25~28年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C)))(一般)研究成果報告書、2017年)を刊行した。主な目次構成は、以下の通りである。

序章

第1章 教育病理学前史としての「学校病」の特質と「児童矯弊論」

第2章 雑誌『教育実験界』にあらわれた教育病理学の理解に関する一考察

第3章 雑誌『児童研究』にあらわれた教育病理学の特質

第4章 雑誌『神経学雑誌』にあらわれた教育病理学の特質

結章に代えて

補論

補論1 教育学関係辞典・辞書にあらわれた教育病理学の特質

補論2 「教育病理学」という名を冠した著作にあらわれた教育病理学の特質

補論3 明治期刊行「教育病理学」関係著作の整理を通して見た「教育学」の特質

補論4 教育学説史研究における教育研究者の個人史的整理に関する一考察 - 大村仁太郎と乙竹岩造と「教育病理学」概念の普及課程 -

補論5 「教育病理学」専門書・参考書の特質

補論6 心理・教育・精神医学関係雑誌に掲載された「教育病理学」関係記事の傾向について

【資料編】

(6) 今後の研究課題としては、「教育病理学」の「移入過程」以後の、「展開過程」「分化過程」について検討する必要がある。また「近代日本における『教育病理』の歴史的研究」を課題としていることに鑑みれば、「教

育病理学」の検討に止まらず、「教育病理」に関する総合的検討を行う必要があり、これらの点にもとづき、本研究は継続・発展し進める必要があると考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

(1) 下山寿子「近代日本における『教育病理学』の移入と普及過程に関する史的研究(1) - 明治期刊行『教育病理学』関係著作の整理を通して - 」『2013年度 検証・教育実習 - 教職課程年報 - 』査読無、2014年、149-162頁。

(2) 下山寿子「教育学説史研究における教育研究者の個人史的整理に関する一考察 - 大村仁太郎と乙竹岩造と『教育病理学』概念の普及過程 - 」『2013年度 検証・教育実習 - 教職課程年報 - 』査読無、2014年、163-167頁。

(3) 下山寿子「雑誌『児童研究』は『教育病理』現象をどのように伝えたか(1) - 『教育病理学』欄(1907~1909年)の再検討 - 」『高崎商科大学紀要』査読有、第30号、2015年、47-54頁。

(4) 下山寿子・菅原亮芳「近代日本『職業案内書』文献目録(未定稿)」『2014年度 検証・教育実習 - 教職課程年報 - 』査読無、2015年、178-190頁。

(5) 下山寿子・菅原亮芳「近代日本における『教育病理』の歴史的研究(1) - 『神経学雑誌』の発行母体・教育病理観・刊行状況の検討を手がかりとして - 」『2015年度 検証・教育実習 - 教職課程年報 - 』査読無、2016年、140-145頁。

[学会発表](計0件)

[図書](計1件)

下山寿子『近代日本における「教育病理学」

の移入過程と心理・教育・精神医学ジャーナリズム』(研究代表者:下山寿子、課題番号:25381037 平成25~28年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C))(一般)研究成果報告書)2017年、総ページ数300。

[産業財産権]

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

[その他]

ホームページ等 特になし

6. 研究組織

(1)研究代表者

下山寿子(SHIMOYAMA TOSHOKO)
高崎商科大学・商学部・教授
研究者番号:30287908

(2)研究分担者

菅原亮芳(SUGAWARA AKIYOSHI)
高崎商科大学・商学部・教授
研究者番号:40348149